

ナガサキ—1945年8月9日



標題は長崎総合科学大学平和文化研究所編「岩波ジュニア新書」

1984年。表紙裏には、「飯島宗一元学長寄贈」という朱印が押されていた。名古屋大学中央図書館の原爆、広島・長崎関係には、こうした飯島宗一先生の寄贈書が多い。

本書はⅠ歴史と殉教の街—長崎、Ⅱ原爆と長崎、Ⅲまぶたに浮かぶ運命の日、Ⅳ長崎を最後の被爆地に、Ⅴ行動への決意から構成されている。43の「話」で分かりやすく綴られている。ところどころの片寄俊秀教授の挿絵にも注目。ここでは、42「平和の花を咲かせたい—渡辺千恵子の四つの人生」を紹介したい。渡辺千恵子さんは「原爆乙女」、長崎「語り部」第1号として活躍し、1993年に64歳で亡くなった。

— 渡辺千恵子が被爆したのは16歳、いまでいえば高校1年生のときである。「撃ちてし止まん」という熱烈な軍国少女の意気に燃え、学徒報国隊として三菱電機製作所で働いていた。これが彼女の第一の人生であった。

あの日、青白い閃光とともに気を失い、われに返った彼女が見たものは、無残な廃墟と地獄絵さながらに逃げまどう人びと、そして飴のように曲がった巨大な鉄骨の下敷きになった自分の姿だった。やっとのことで救出されたが、背骨をやられ、すでに下半身の感覚を失っていた。以来、歩行はもちろん、立つことさえできない身体になってしまった。

その後、高熱、下痢、吐き気がつづき、生死の境をさまよう彼女が、なんとか生きのびられたのは、母の必死の看護と愛情によってであった。

1955年の初夏、第一回長崎県母親大会が開かれたとき、鶴見和子が油屋町の千恵子を訪問した。鶴見はこのときの印象を「生きている人という感じはなく、顔色も真っ白でまったく人形のようなだった」と語っている。原爆によって強いられた、いわば「生ける屍」のような日々、これが千恵子の第二の人生であった。

しかし、鶴見らの来訪が千恵子の胸底に一点の灯をともし、やがて彼女は長崎生活を綴る会の主婦たちの仲間に入り、また、長崎原爆乙女の会の一員として、被爆者としての自覚を強めていくことになる。

こうして千恵子の第三の人生が始まるが、その決定的な契機となったのは、1956年8月9日、長崎で開かれた第二回原水爆禁止世界大会であった。前夜から一滴の水もとらず、体が緊張で震える彼女をしっかりと抱いて励ましたのは母親、渡辺スガであった。

11年間秘めていた原爆への怒りを涙とともに訴える千恵子に、満場の拍手が湧いた。

このときの喜びと感動は、それまで彼女の中にひそんでいた虚無感や絶望を一気に吹き飛ばし、彼女は心の底から、「生きていてよかった！」と叫ばずにはおれなかった。

「これからは原爆の生き証人として、原水爆禁止運動の中に生きよう。私を滅ぼそうとした原爆を滅ぼす運動に残された生涯をかけよう。」彼女はこう決意したのである。

しかし、千恵子は相変わらずベッドに寝たきりで、身のことはすべて母に任せてきた。その母も年老いて入退院をくり返すようになると、千恵子は「もし母がいなくなれば……」という不安におののいた。そこで、せめて身のことや最少限の家事はじぶんでできるようにと、彼女は新しい住宅づくりを考えはじめるようになった。1978年1月、障害者の住宅や町づくりを研究している長崎総合科学大学の日比野助教授をはじめ多くの人びとの協力で、長崎市郊外の長与町に「千恵子の家」が完成した。身障被爆者住宅として工夫がこらされたこの家は、32年にわたる彼女の寝たきりの生活にピリオドを打った。その喜びは、たとえようもなく大きかった。こうして千恵子の第四の人生が始まったのである。

その頃、ジュネーブで開催されることになったNGO主催の国際軍縮会議から、彼女に参加の要請があった。ずいぶん悩んだが、大ぜいの人びとに支えられて、車椅子の千恵子は海を渡った。開会総会で全世界にむけて核兵器廃絶を訴えた彼女の呼びかけは、参加者全員が総立ちになるほどの感動をまきおこした。

自立し世界をひろげてゆく千恵子とは逆に、同じ被爆者である母の老いと衰弱はすみ、今度は千恵子が母を介護し、入浴させるまでになった。そして新居完成の1年後、「千恵子のことはもう安心」との言葉を残して母は82歳の生涯を閉じた。

千恵子は、深い悲しみをのりこえ、ひたすら自立への道を進んだ。その中で彼女は、自分が被爆者であると同時に一人の身障者であることを強く自覚し、他の多くの身障者とのふれあいの場を求めていく。

母の一周忌を終えた1980年8月、千恵子は沖縄の石垣島に出かけ、八重山障害者の「障害者と家族の集い」で「平和と福祉そして自立」と題して講演したが、重度身障者と家族たちの明るくたくましい生きざまは彼女の胸を打ち、戦争の傷跡をいまなおとどめる沖縄の現実とともに、あらためて平和と核廃絶への決意を固めさせた。石垣のコバルトブルーの海に魅せられた彼女は、この日、35年ぶりで海水浴を楽しんだ。

その後の千恵子は、第二の青春が戻ったかのように、30数年間たくわえてきたエネルギーを、一気に放出しはじめた。1982年6月ニューヨークの反核百万人大行進、83年西ベルリンでのヨーロッパ核軍備撤廃大会に参加し、国内では北海道から沖縄まで、全国どこにでも出かけて行って、反核を訴えた。

「もう戦争はいや、原爆はごめんよ。私のような被爆者をつくらないで！未来は私たちみんなのもの、平和の花を咲かせましょう！」彼女は人びとに今日も語りかけている。

(2017年10月14日)